

7 森鷗外のワイルド紹介

(1) 森鷗外

森鷗外(1862-1922)は石見国(現・島根県)津和野に生まれる。本名は林太郎。津和野藩医の家柄で、鷗外は長子として誕生した。明治3年(1870)よりオランダ語、明治5年(1872)よりドイツ語を学び始めた。明治7年(1874)1月に第一大学区医学校予科へ入学、明治10年(1877)に東京大学医学部の本科生となり、明治14年(1881)7月に卒業した。その後は陸軍軍医となる。明治17年(1884)には衛生学研究の目的で、ドイツ留学を命じられ、明治21年(1888)9月に帰国した。鷗外の文筆活動は明治22年(1889)頃より本格的に始まった。明治22年(1889)8月には『舞姫』、『うたかたの記』などを発表、明治24年(1891)には『早稲田文学』誌上で坪内逍遙と没理想論争も大きな話題となった。明治25(1892)11月よりアンデルセン(Hans Christian Andersen, 1805-1875)の『即興詩人』の連載を始めた。明治32年(1899)には大村西崖と共に『審美綱領』(春陽堂)を出版するなど、美学の分野でも鷗外の名を轟かせた。これはハルトマン(Eduard von Hartmann, 1842-1906)の *Philosophie de Schönen* (Leipzig, 1887)の翻訳である。

鷗外は明治40年(1907)には陸軍軍医総監、陸軍省医務局長になり、明治41年(1908)には文部省の臨時仮名遣調査委員会委員になり、明治43年(1910)には慶應義塾大学の文学科顧問などもつとめ、後年には帝室博物館総長、帝国美術院の初代院長などにも就任するなどの活躍を見せている。軍医、文学者、美術家として多彩な才能を発揮した。

(2) 「脚本『サロメ』の略筋」

日本に『サロメ』を紹介した第一人者はドイツ留学の経験のある森鷗外である。鷗外は明治40年(1907)8月の『歌舞伎』(第88号)で「脚本『サロメ』の略筋」を掲載し、鷗外はまず路加傳(ルカ傳)第三章に言及し、「サロメ」の略筋を紹介している。ワイルドとサロメについて述べている。その一部を紹介しておく。

千八百九十年代になつてから脚本を多く書いたが、大體金の為であった。この「サロメ」も時代は其頃のものだけれど、全て外の作と違つて居る。殊に妙な事には、この脚本は初英文で書けずに佛文で書いて、サロメエ・アン・アクト・バアル・オスカア・ワイルドとして、千八百九十三年に巴里で出版した。英譯はツウグラス卿が筆を取つて、千八百九十四年に倫敦

で出版した。諄く批評はせねが、この作は様式を命にして居る脚本で、その事柄は如何にも幻像的なので、文壇通の側で稱美して居るのだ。

この作の出た年邊から後のワイルドの作品は、極端な諷刺的なものになつて了つた。⁽¹⁾

鷗外のワイルド紹介で興味深いのは、金銭についての記述があることだ。前述の引用でも「大體金の為であつた」といった内容もあるが、さらに「死ぬる時は困窮して居たさうだ」⁽²⁾といった記述も見られる。これは、鷗外のドイツ留学での生活感覚がこうした記述をさせているのかもしれない。また、鷗外の大きな特徴として、ドイツ留学が大きく反映されているのである。ドイツにおけるワイルドの流行についても触れている。

現今の處では、ワイルドの流行は、本國よりは獨逸の方が盛な様に見える。英文學の脚本で、頻に獨逸の舞臺に上るのは、バアナアド・ショオのものとおスカア・ワイルドのものと主として居るらしい。

同じサロメの事を書いた獨逸のズウデルマンの脚本がある。題号は「ヨハンネス」で、預言者の方を主人公にしてはあるが、サロメにも随分重みが附けて書いてある。五幕物で、初に序幕が別に添へてあるから、都合六幕になる。ワイルドのから見ると、容積からいへば大いに相違ないが、どうもワイルドの一幕物ほどの感じが起こらない。⁽³⁾

さて、ここで出てくるズウデルマン(Hermann Sudermann, 1857-1928)の『ヨハンネス』(Johannes)は明治32年(1899)に発表されたものである。

その後、明治42年(1909)9月～10月の『歌舞伎』(第110号～第111号)で『サロメ』の翻訳を發表し、明治43年(1910)の『統一幕物』(易風社)に収録された。翻訳原本はドイツ語版(Tragödie in einem Akt. Deutsch von Hedwig Lachmann, Leipzig Insel Verlag, 1906)であつた。ドイツでは明治38年(1905)にリヒリャルト・シュトラウス(Richard Strauss, 1864-1949)が『サロメ』を1幕のオペラに作曲、同年ドレスデンで初演された。この3年前にはミュンヘンのアカデミー演劇協会でマックス・ラインハルト演出の『サロメ』上演がドイツ各地で行われていた。坪内逍遙と共に演劇改良運動では脚本の改良を第1に主張していたことでも知られている。鷗外は演劇改良運動への鷗外の態度については、明治32年(1899)の『志がらみ草紙』(第1号)に掲載された「演劇改良者の偏見に驚く」が参考となる。逍遙が国劇向上のために脚本改良の手段として結果的にシェイクスピアの翻訳全集に取り組むようになり、鷗外はその

選択肢のひとつとして、「様式を命にして居る脚本」⁽⁴⁾の『サロメ』に注目したのだろう。また、ドイツに留学していた経緯からも、ドイツ美学の影響を受けていることも大きな要因と言える。

いずれにせよ、鷗外のワイルド理解は、大正時代のサロメ・ブームを考えると彼の見識の確かさを裏付けるものである。『サロメ』上演における様式美への注目は、単に大正時代のサロメ・ブームの予言的なものではなく、サロメを象徴劇としてとらえたものである。日夏耿之介(1890-1891)や三島由紀夫(1925-1970)にも共通して見られるものである。

単に『サロメ』翻訳の初出ということなれば、明治42年(1909)の『新小説』(第14巻第3号)の小林愛雄訳「悲劇『サロメ』」ということになる。小林は前年の8月に「オスカー・ワイルド詞華」(『帝国文学』第14号第8号)でいくつかの詩を訳出している。鷗外はやがて訪れるサロメ・ブームの先駆者と言ってよいだろう。

参考資料

井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド 移入期(第1部)」(『鶴見女子大学紀要』第7号、鶴見女子大学、1969年12月)

山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月

佐々木隆「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第13輯、武蔵野短期大学、1999年6月)

注

(1) 鷗外漁史「脚本『サロメ』の略筋」(森林太郎『鷗外全集』第26巻、岩波書店、1973年12月)、pp.259-260.

(2) p.259.

(3) p.260.

(4) p.259.